

云、或曰、即蜻蛉也、江東呼狐梁、古今注云、蜻蛉一名青亭、一名胡蝶、青而大者也、兼名苑蓋本於此、胡蝶當胡蝶之誤、蓋遠年所見、古今注誤作胡蝶、與今本同源、君襲之也、

〔醫心方〕虫一蜻蛉 和名加支呂布 又加介呂字

〔類聚名義抄〕虫十蜻蛉 カケロウ 胡螯 カケロフ

〔下學集〕氣形蜻蛉 字書云、蜻蛉色青而大曰

〔輿儀抄〕物上未異名 あきつは、かげろふといふ虫の名也、

〔日本釋名〕中蜻蛉 カゲロウ かける也、飛かける虫也、蜻蛉は飛羽也、

〔東雅〕二蜻蛉 カゲロウ 古にはアキツといひ、後にはカゲロウといふ、即今俗にトンボウ

といひて、東國の方言には、今もエンバといひ、また赤卒をばイナゲンザともいふ也、並義不詳、萬集抄に、秋津とは蜻蛉なり、アキツといふは、東詞にはエバといふ也、和語の心によらば、アキは黄ナゲンザと云ふも、稻熟する時にあるをいふ也、ゲンザといふは、エンバといふは、猶ヤハハといふ語也、童部のヤンマなどいふも、エンバの轉ぜし也、エンバといふは、即エバ也、エバといふは、エンバといふは、二つあるを、此虫の羽、四つあれば、かきなれる羽といふ也、總ては是をアキツといふは、多きは二つあるを、此虫の羽、四つ頭、即今俗にヤマホウ者といふ也、蜻蛉、則アキツといふ、即今トンボウといふ者なり、其最大者、馬大は赤卒、古にアカエムバといひ、即今俗にアカトンボウといふもの也、又イナケンザといふも、極めて細く、小しきなるが、草叢の間に其羽を重ね、植て止るもの也、即今俗にカゲロウといひ、は是也、此物誠にありとも、草叢の間に其羽を重ね、植て止るもの也、即今俗にカゲロウといひ、は是也、

〔比古婆衣〕四玉蜻考

萬葉集の歌に、玉蜻蜒、玉蜻、珠蜻など書るを、前の人々、カギロヒとよみ來れ、ど、蜻蛉をカギロヒ書どもに見、おのれはタマカギロとよむべく、おもへるよしあるをいはむとす、其はまづ本草和名に、中和名加岐呂布とみえ、註萬葉に陽炎を蜻蜒、火蜻火など火字を加へて作るをおもへ

ば、そのかみ加岐呂布を加岐呂、また加岐流ともいひ、そが中の一種に、玉加岐呂といふがありて、